
ライバルは婚約者！？

奈津美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライバルは婚約者！？

【Zコード】

N9700A

【作者名】

奈津美

【あらすじ】

この話は「ライバルは中学生！？」の続編です。平×和です。
ある日、平次に婚約者が現れて・・・。

* 0 深夜の作戦（前書き）

お待ちしていたみなさん。
新連載です^ ^

* 0 深夜の作戦

俺の名前は服部平次。

西の高校生探偵や。

工藤とねえーちゃんは見事ラブライブになつたなあ。

ん?俺の方はつて・・・。

和葉は俺の子分や!!

和葉つちゅーのは遠山和葉。俺の幼なじみや。

まあ、後の登場人物は・・・。

俺のオカソの服部静香。

オヤジの服部平蔵。

まあ、こんなトコやな。

じゃあ、本編の始まりやで。

もつ夜遅い。

しかし、服部家からは話し声がした。

「あなた、話したい」とがあります。」

「なんや、静。遠山と遠山わんも連れておよつて。」

「平次と和葉ひやんの」となんやけど・・・。」

静香は長々と話した。

十分後・・・。

「ああ、それはいいんとちやうへ・・・。」

「私も賛成や。」

「遠山わんあらがとむ。あなたは?」

「しゃーない、俺も協力したる。」

「あらがとむ。ほな、作戦は決行します。」

深夜の話し合いで決まった作戦。

この作戦とは

いつたいなんなのか・・・。

それはこれからのお楽しみ・・・。

* 0 深夜の作戦（後書き）

「んにちは、奈津美です。

新連載が始まりましたー。

ところで・・・和葉のお母さんって・・・？

まあ、細かいところはおいといふと（笑）

評価やアドバイス、感想等をよろしくお願ひします。〃〃

* 1 「婚約者やでー?」（前書き）

「ライバルは中学生ー?」より文が短い点を反省。

* 1 「婚約者やでー!？」

八月の上旬。

俺は家でのんびりしてた。

ベットドーナツしてるのもつまらんなあ。

本読むのにも飽きてしもつた。。。

寝てしまおうか。。。

トントン

俺の部屋を叩く音。

俺は、このドアを開けなきやよかつたと後悔した。

「和葉か?」

ガチャ

「平次、ちょっとええ?」

「オカソ?なんや急に。」

「平次に紹介したい人がいるんやけど。」

「誰や?」

「だから、今から紹介するつて言ひしゆやね。」

「俺はしゃーないからオカソにつけってつた。」

「なんかいやな予感するんやけど……。」

ガラッ

「あら？ あなたが服部平次君かしら？」

「は、はあ……。」

「座つていたのは着物の女やつた。」

「髪はロングでかんざしさしてた。」

「俺より年上っぽい。」

「で……誰や」「いつ？」

「平次、この方は上野ぐれはさん。」

「ぐれはですわ。年は二十です。」

「で、なんなんや……。」

「こいつは俺と関係あんのか？」

「オカソ、用はこれだけか？」

「平次、今日から上野さんはあなたのフイアンセよ。」

「フイアンセ?」

「私は、平次さんの婚約者ですわ。」

「婚約者や!」

ボトッ

何かが落ちる音がした。

俺は、まさかと思い後ろを見たんや。

「・・・・か、和葉。」

和葉がびっくりした顔して立つてた。

「へ・・・平次。」

「あら、和葉ちゃんいらっしゃい。」

「あ・・・あ・・・。」

和葉は驚いていた。

震えてた氣もした。

その場には沈黙が流れてしまった。

床には和菓が落とした

クッキーが散らばっていた・・・。

* 1 「婚約者やで！？」（後書き）

新一「みなさん、お久しぶりです。」

作者「今日のゲストは新一でーす！」

新一「服部に婚約者かあ・・・。」

作者「しかも年上ですよ。」

新一「前回の話しあいと関係でも？」

作者「さあー。」

新一「気になるじゃねーか！」

作者「ではではいつもの決め台詞！」

二人「真実はいつも一つ！」

* 2 「逃げるで、和葉！」（前書き）

タイトルは全部大阪弁にします^_^

* 2 「逃げるで、和葉！」

俺は上野さんの方を見た。

上野さんは一ヶコリした。

俺はこの雰囲気の中

じつとしてられなかつた。

「オカソ、すまん。俺は婚約者なんていらん。」

「ちよつと平次。」

「すまん、上野さん。俺は婚約者なんていらんのや。」

「平次さん・・・・。」

上野さんに会釈をしてから

俺は和葉を引つ張つた。

「逃げるで、和葉！」

「ちよつと平次！――」

俺は、和葉を連れてその場から逃げたんや。

とにかく逃げた。

「くれはむちゃん、ありがとねえ。上手くいくかもしねへん。」

「そんなん、静香さんの作戦のおかげやないですか。」

「ただなあ、平次は恋愛には鈍感なんや。」

「せうやの? じゅあもう少し手伝わなアカンなあ。」

「・・・・・・・・・・・・

俺達はとつあえずヒマワリの園に逃げた。

珍しく人がいてへんから奥まで逃げた。

「平次、婚約者ってなんなん?」

「知らん、オカソが勝手にやつたんや。」

「ハアハア、疲れたんやけど。」

「すまん、ほなこの前のベンチに行こひつか。」

俺達はベンチに向かった。

「着いたで・・・。」

「ハアー疲れた。」

とつあえず、座った。

サンサンと照りつける太陽。

地獄のような暑さだった。

「平次は、あの人の！」とじり思つてゐるんや？」

「じりつて・・・別に元氣一もせん。」

「ホンマに・・・？」

「あたりまえやないか。いきなり婚約者つて言われてもなあ。」

「結婚ちやんよつタチ悪やつやで。」

「ややな・・・。」

上野さんのがいきなり現れた理由とか

細かいことはよー分からんけど

俺は婚約する気になんてこれっぽいもしない。

「平次は・・・誰が好きなん？」

「くつ？聞けへん。」

「・・・なんでもない。」

「やうなん？ならええけど。」

なんだか息苦しかった。

「キドキもした。

「これが恋なんやろーか・・・・・。

そやかて、子分に恋なんてなあ・・・・・。

俺はこれからどうしようか考えた。

ただ、家には帰りとお無かつた。

和葉ともう少ししておいいかな。

なんて考えてもみた。

「和葉、さつきクッキー持つてきてたやん。」

「えつーー?」

平次・・・・氣づいたん?

けど・・・・床に落としてしまった。

「また・・・・作れや。」

「へ、うん。」

「お前のクッキー食べてくれる奴おら」と思つしなあ。」

「は、はあ！？」

「何が入つてゐるか分からんやろ。」

「平次のアホー！！」

バシッ

「平手打ちかいな・・・。」

平次の頬には

和葉の手の跡がくつきり残つていた・・・。

* 2 「逃げるで、和葉!」（後書き）

作者「新一に続くゲストは・・・？」

快斗「快斗です。」

作者「初登場だねー。」

快斗「俺も出るのか？」

作者「いや、出さないよ。」

快斗「！？」

作者「あのね、本編で出せないからせめてここでみたまう」

快斗「そんな・・・。」

作者「ま、まあどんまい！じゃあいつもの決め台詞！」

二人「真実はいつも一つ！」

ここにちは、奈津美です。

少し、小説書くのに慣れたかな？

私には尊敬してる先生が何人かいりますが。

その人のように書くのは無理ですねー。

朧月さんやヨーリさん達にこの作品を読んでもらい

真に光栄です

評価やアドバイスや感想等をよろしくおねがいします。

おもしろさに欠ける小説ですが
どうぞお読み下さーへへ

* 3 「助っ人からの電話やで」（前書き）

タイトル長くてすいません^ ^ ;

* 3 「助つ人からの電話やで」

平次。

ずっと気になつてたんやけど

平次の好きな人って誰なん?

初恋の人が私やとしても・・・。

今は分からぬいやないか。

プルルルルルル

誰もいなヒマワリの園に

平次の携帯音が鳴り響いた。

「はい、服部やけど。」

『服部、俺だよ俺。』

「おおーー! ト藤やないか!」

『実はせ、お前に渡したい物があるんだ。』

工藤・・・・!

「そーやー! またそつち行つてもええか?」

『はああー!』

「ちよっと、平次! それは工藤君に迷惑やろ!」

「かまへんかまへん。」

『かまへんじやねーよ。』

東京に逃げれば婚約者とか『ごせや廻』にせらるやないか。

「工藤、訳ありなんや! 頼むむ!」

『・・・しゃーねーなあ。』

「サンキューな、工藤!」

『で、こいつへ』

「今日や。」

『今日だとおおおおおおおーーー!』

なんや、工藤。

そんなんに驚く! とないやないか。

そりや、少し急やけど・・・。

「平次、かわってえや。」

「ほな、和葉に代わるで。」

『あ、あ。』

「もしもしく、工藤君。『めんなあ、急すぎやね。』

『ホントだよ。』

「実はな、平次に婚約者ができしもつた。」

『なに！ 服部には和葉ちゃんがいるじゃねーか。』

『ホントやで、おばけやんが平次に紹介したんやー！』

『あひやー・・・だから服部がいつかに来たかったのか。』

「私・・・じゃないしよ。」

『え？ なんですか？』

「あつがとお。」

『服部のお母さんを説得してやるよ。和葉ちゃんがいるんだって。』

優しく声出しあつて・・・。

なんせ、和葉のやつ

『あ、あ。』

相手は工藤やぞ！

「和葉、代われや。」

「う、うん。」

『もしもじ？』

「こりあー！工藤！今何話してたんやー！」

『何つて、俺が大阪に行くつて・・・。』

「・・・ホンマか？』

『あ、ああ。』

『分かつた、じゃあ切るで。』

『お、おーー。』

ピッ

「なんや？平次・・・。」

「なんでもあらへん！』

さらば暑くなつただろう。

まだ15・00だ。

サンサンと照りつける太陽

空には入道雲が出ていた。

雷でもなるのやううか？

「なあ、平次。」

「なんや？」

「寝てもええ？疲れてしまつた。」

「」の暑さの中

じつとしつめるもつりこせぬ。

「ええよ、肩貸すで。」

「あらがとお・・・。」

和葉は俺の肩によりかかった。

そのまま寝てしまつた。

和葉は・・・どう思つてんのやううか。

和葉の初恋の人つて誰なんやうか。

俺は地獄のような暑さの中

いろんなこと考えた。

横で和葉は

「・・・平次。」

と呟いていた

流れる雲を見ていたら

これから不安になつてきた。

* 3 「助つ人からの電話やで」（後書き）

「んにちは、奈津美です。

明日は体育祭です^ ^

中学一年生になってから忙しくなりました。
もつと前から小説書けばよかつたなあ。

なんて、後悔^ ^；

尊敬している先生に評価をいただけるのは
本当に嬉しいですね。

もちろん、みなさんの評価も嬉しいです。

ジエーンさんの小説が大好きなんですが・・・。
最近見てません・・・(、・・、)

小説つて書くのも読むのも楽しいですねえ。

作者「今日のゲストは・・・。」

歩美「歩美です！」

作者「おおー番外編で活躍したねえ^ ^」

歩美「うん！」

作者「光彦とはどう？」

歩美「ナカヨシだよ。」

作者「まだダメかあ・・・じゃあいつもの決め台詞ー」
二人「真実はいつも一つー」

* 4 「寝言やなーか」(前書き)

タイトル考えるのに一分消費（笑）

* 4 「寝言やないか

まだ16：00だ。

地獄のような暑さは変わらなかつた。

しかし、空は変わつた。

黒い雲が集まつた。

今にでも雨が降りそうな感じや。

「和葉、起きなれや。」

「ん・・・・。」

「平次・・・・。」

なんや「ゴイツ・・・起きないやないか。

また俺の名前呼んでるやないか・・・。

「あんたの好きな人は・・・誰なん?」

「和葉!?」

「スースー。」

寝言やないか・・・。

焦つたでえ・・・。

ん?なんで焦るんや?

好きな人なんていないやないか。

で、和葉を起こさなあかんな。

けど、和葉の奴氣持ちよれども二寝てるんや。

起きるのも気が引ける。

「・・・しゃーないなあ。」

俺は和葉を負ふった。

起きれないよつれりと家に帰らつとした。

家に帰りたくないが、しょうがなかつた。

ポツツポツツ

「ん?」

顔に落ちる雨。

雨の降り始めた。

ザーザー

「げつ・・・ドシャ降りや。」

俺は着てた上着を和葉に掛けた。

風邪引かれたら困るからな。

「つくしゅん！」

あかん・・・早お帰らなあかん。

俺が風邪引いてまつ。

俺は水溜りなんて気にせず走った。

ガラツ

玄関の戸を開ける。

「オカン、タオル持つてきてえや！」

俺は和葉を降ろした。

「ん・・平次？」

「アホ、お前どんだけ寝てるんや。」

「じめんなあ、疲れてしもうて・・・ん？」

「じひしたんや？」

「平次が運んでくれたん?」

「ああ、おんぶしたんや。」

「ありがとお・・・。」

和葉の顔が綺麗だったから

俺はなんにも言わなかつた。

タツタツタツ

走つてくる音やな。

きつとオカンが・・・。

「平次さん、タオルですわ。」

「上野さんー?」

なんで・・・なんで・・・

「ううういるんやーー!」

「あつ、和葉ちゃんもどつね。」

「ありがとお・・・。」

「じゃあ、私は料理の手伝いがあるので。」

上野さんは台所に向かつた。

「平次、あの人いい人やなあ。」

「ん？」

「だつて、タオルくれたやないか。」

「タオルくらい普通やろ?」

「けど、私にもくれたやん。」

「ま、まあそやけど・・・。」

いい人とか悪い人とかいう問題やないねん。

婚約者つづーのが問題や。

「ハアー。」

なんか・・・体が熱い。

目が回りそうや・・・。

グラッ

あ・・・かん・・・。

バタンツ！

「平次！！」

俺はそのまま氣を失つてしまつたんや。

和葉の声が聞こえたけど

まぶたが重くて

開けられへんねや・・・。

* 4 「寝言やないか」（後書き）

作者「今日のゲストは・・・。」

園子「園子ちゃんでーす！」

作者「ではではご感想を。」

園子「こっちもまたじれつたいわねえ・・・。」

作者「そーですねー。」

園子「服部君かっこいいわよねえ・・・。」

作者「色黒好きめ・・・。」

園子「もちろん真さんの方が好き～！～！」

作者「はあ・・・それではいつもの決め台詞ー。」

二人「真実はいつも一つー。」

* 5 「風邪引いてしもうた」（前書き）

平次が風邪引くのか・・・?

* 5 「風邪引いてしもつた

まだ田が回る・・・・。

あかん・・・熱い。

寒いけど熱いんや・・・。

助けてくれや・・・・。

「平次・・・平氣?」

「ん・・・・。」

田が覚めた。

田の前には心配そうな顔してる和葉がいた。

「う・・・・。」

俺は体を起こうとした。

「まだ起きたらアカン!」

「な・・・んでや。」

「平次、熱がまだ下がつてないんよ。」

「何度もあるんや・・・・?」

喉は痛くない。

しかし、熱い。

そして、寒い。

頭が痛い・・・・。

「38度5分やで、だから無理したらアカン。」

「そか・・・・。」

「ちょっと、待つててな。」

バタンッ

和葉は部屋から出て行つた。

服部は考えた。

工藤が来る前には治さなアカンな。

それと、悪いけど

上野さんには諦めてもらわなあかん。

俺には・・・・。

和葉つちゅー子分がいる。

婚約者なんて「いらん……。

「いらんねや……。

アカン、頭痛いんやつた……。

バタンシ

「平次、りんごやで。おこしいであります……。」

平次はボーッとしていた。

風邪を引いてても

平次の田の輝きは変わらなかつた。

キラキラしている……。

「おひ、りんごかあ。いただきます。」

「いや、早め一食べて元気になつてや。」

「サンキューな、和葉。」

「礼なんていい、元気になつてくれればええ。」

おれはりんごを食べた。

シャリシャリ

「つまいまいなあ・・・・・。」

トントン

「オカソーン?」

ガチャ・・・・・。

「アホは風邪引かへんのになあ。」

「親父!-?」

「平次のお父ちゃん!-」

親父が俺の部屋に入つてくるなんて

何年ぶりや・・・・。

「和葉ちゃん、風邪引いてないか?」

「平氣です。」

「そりが、そらよかつたなあ。」

「よくないやろー。息子が風邪引いたんやでー。」

「ああ、まあ早く治せや。」

「なんや・・・それ。」

キツネ目親父め・・・・。

「和葉ちゃん、悪いけど外出でもうってええか?」

「あつ、はい。」

「ん? なんでや?」

「じゃあ、じゅっくり・・・・。」

和葉は足音立てずに部屋から出た。

平次の部屋には

平蔵と平次の

二人っきりになつた・・・・。

ザーザー

外はまだドシャ降りだつた。

外はとても暗く

空はとても黒かつた・・・・。

* 5 「風邪引いてしもうた」（後書き）

作者「今日のゲストは・・・・・！」

英理「私だけ？」

作者「小五郎さんに、一言！」

英理「まあ、最近頑張ってるみたいね。」

作者「ゴロちゃん元気ですか？」

英理「ええ、とても元気よ。」

作者「ゴロウのゴロですもんね^ ^」

英理「^ ^ ^ ^ ^」

作者「ではではいつもの決め台詞！」

二人「真実はいつも一つ！」

奈津美です。

この話が完結したら何を書こうか悩んでます。
つてまだまだ完結しそうにない^ ^ ;

口×哀でも書こうかなあ・・・。

ハッピーエンドにはさせないけど(* m) ププッ
そーいえば、小五郎×英理 を書いてと言われたことも
難しいから無理かも・・・・・。

ああ・・・どうしましょう！

あと、評価よろしくお願ひします^ ^

* 6 「親父の怒りや」（前書き）

大阪弁のタイトルつてのも難しい・・・。

* 6 「親父の怒りや」

親父と一人つて

なんか休めないというか・・・。

なんといつか・・・。

「なあ、平次。」

「なんや・・・?」

「和葉ちやんとせりうなんだ?」

「はあ?」

親父が「んな」と言つなんて・・・。

頭がいかれてしもつたんとかやつ?

大丈夫やろか・・・。

「じつって・・・和葉は俺の子分や。」

「お前、それ本氣で言つてんのか?」

「本氣やで?」

バンッ

「うーん。」

親父はこきなり俺を殴つた。

「アホぬかせー和葉ひやんを幸せにできると想つたのこ。。。。」

「親父。。。？」

「わハハハハ。お前はくれはれことお母セヒ。」

「おこ、親父。」

「なんぢ。」

「上野わざつて誰ぢ？」

「だから前の婚約者やー。」

「セー二ウ」とせなこーじつから現れたんやー。」

「俺の親友の娘や。」

「セウセウしたんー?」

どつかのだれかさんかと思つてた。

「」れかう回西やで。」

「。。。。>ひへ。」

「だから、これから一緒に住むんや。」

「・・・誰と?」

「アホ、くれはさんに決まってるやないか。」

「ロロロロロ・・・

「・・・・・。」

「平次?」

「・・・・ええええええええええええ!ー!ー!

「ーン!ー!

どじかに雷が落ちたんやろか・・・。

アカン・・・同居やて・・・。

俺はショックのあまり倒れてしもつた。

「おい、 平次!ー?」

親父の奴・・・びっくりしたやうなあ。

急に倒れたんやから・・・。

なんで上野さんと同居なんてせなアカンねん。

親父の親友の娘からやといつて・・・。

婚約する気はない・・・。

ないんや・・・。

『平次・・・・・』

和葉の声が聞こえる・・・。

和葉・・・お前は

俺のこと

どいつ思つとんのや?

俺は・・・

和葉の方がええ。

上野さんがいくら美人やからつて・・・

和葉の方がええ。

これつて・・・なんや?

和葉は子分なんか?

いや・・・それ以上や。

子分じゃないんや……。

「平次……。」

『氣につけたら俺はベットで寝てた。

わつかよつ少し樂や……。

「か・・和葉。」

「わつかよつ熱下がったんよ。」

「わつか……。」

「けど、まだ七度八分あるから寝てなアカンよ。」

「分かつとる。」

「ならええけど。」

「和葉……。」

「なんや?」

「サンキューな……。」

「平次……。」

私は気づいた。

平次の口の横に

殴られた痕があつたんや。

きつと・・・お父ちゃんに殴られたんやと黙りへ。

なんの話してか分からん。

ただ・・・平次の目は

いつもよりキラキラしてなかつた。

トントン

「はー?」

ガチャ

「平次さん・・・平氣ですか?」

上野さんが部屋に入つて來た。

ピカッ

窓の外が光つた。

雷や・・・。

この雷はなにを表しているんやうか・・・。

* 6 「親父の怒りや」（後書き）

奈津美です。

最近はいろいろと忙しいです^ ^ ;

来週はなかなか投稿できないかもしだれません^ ^ ;

ごめんなさい！

まだまだ完結しません・・・。

はづー。

評価やアドバイスを下さー^ ^

ではでは^ ^

* 7 「キスやでーー」（前書き）

私ってキスねたが好きなのかなあ・・・。

* 7 「キスやでーー。」

「平次さん、熱下がりませんねえ。」

「は、はあ。」

「大丈夫です、平次ならすぐ直るから。」

「けど、心配でしょ?」

「ま、まあ・・・。」

「この人・・・凄い。」

話すだけで疲れるぞ・・・。

「うーん・・・おかゆ作ってきますね。」

「かまわんとして下さい。」

「いいんです、あなたのためですから。」

そう言つて部屋を出て行つた。

「・・・疲れた。」

「私もや。」

和葉に言つべきやな。

同居のこと……。

けど、和葉はいつも反応するんやろか。

「あんな・・・和葉。」

「なんや?」

「実は・・・上野さんと同居する」とになってしまった。

「ええええええええええ!」

予想以上の驚きっぷりだった。

「こやせ・・・。」

「和葉・・・?」

「こやせー同居なんてこやせ・・・。」

「和葉・・・。」

俺かて、好きで同居する訳でもないねん。

する気もないねん。

「平次・・・同居する気ないよなあ。」

「あたりまえやないか。」

「いやや・・・平次があの人と付き合つてしもうたが。」

「ありえへん・・・。」

「ん?」

なんで和葉は嫌がつとんのや?」

・・・・??

ガチャ

「平次さん、おかゆですわ。」

「どうも・・・。」

和葉はおかゆを食べるためのれんげを素早く取つた。

「フーフー。」

和葉はおかゆをれんげで取つて、息で冷ます。

「平次、はいアーン。」

俺は恥ずかしながらも口を開けた。

「おいしいですか・・・?」

「おいしいです。」

「そうですかあ。」

平次はペロリと全部たいらげた。

それから体温計で熱を計る。

۲۷۰

一
あ
鳴
こ
た
「

「ちよーと見せてーや。」

熱は三十七度五分だった。

少しづかたてよかたあ

サンキューな

ええ、て

上野のんせおおわら

一
し
え

俺は横になつた

少しでも早く熱を下げるアカンからな。

「平次さん・・・。」

「なんですか？」

「…………」

チユツ

「…………」

「早く…………治して下さーいね。」

上野さんまさひづりってから

部屋を後にした…………。

「平次…………。」

和葉は震えてた。

「今、何したん…………？」

「おでこに…………キスした。」

「誰が？」

「くわはさんが…………。」

「…………。」

キス…………？

上野さんが・・・?

俺に・・・

キス。

「キスやでーーー!!」

俺は驚きが隠せなかつた。

バーン!

雷がまた落ちた。

嵐の予感や・・・。

* 7 「キスやでーー！」（後書き）

作者「みなさん、すいません。」

和葉「なに謝つてん？」

作者「なんかまたキスねたになつてしまつて。」

和葉「そやで、全く・・・。」

作者「いや、あなたが怒るといつたらキスかな？つて」

和葉「う・・・。」

作者「ではではいつもの決め台詞ー。」

二人「真実はいつも一つ！」

* 8 「風せ・・」(活劇)

最近時間が無くなる。

* 8 「嵐や・・」

「平次・・・・・。」

「和葉、俺・・・怒つたで！！」

しかし、和葉の怒りは俺を上回つていったのだ。

「くわはさんめ～～～！！」

バタンッ！！

和葉は勢いよくドアを閉めて出ていった。

「嵐や・・・・・。」

～～～～～

ガチャガチャ

くわはは台所で皿洗いをしていた。

「私も手伝つてええか！」

「あら、和葉ちゃん。いいわよ。」

なにが”いいわよ”や！

少しばかり女の子らしいからって

調子に乗んねや！

ガチャガチャ

「ねえ、和葉ちゃん。」

「なんです？」

「平次さんのこと……好きですか？」

「へへへへへ！」

なんやこの人……。

笑顔で「こんな」と聞くなんて！

「好きやつたら？」

「邪魔してるかなって。」

も「めつちや邪魔や！」

「ええか、今日会った人にイキナリキスはアカンで！」

「おでこでしたけど？」

おでこやてキスには代わりへん！

「あんなあ……キスはキスやないか。」

「せうですが、あれば私の家のおまじないです。」

「おまじないやで　！？」

キスがおまじない？

ホンマかいな・・・。

「お母様が教えてくれました。」

「・・・・・。」

「私が風邪引くと、おでこにキスして早く治れって言つてくれました。」

「けじなあ！」

「お母様は・・・もうこの世にはいません。」

「つーー！」

「しかし、お母様に教えてもらつたおまじないは忘れられません。」

「いへり・・・おまじないかで

キスはいやや・・・。

平次が好きやから・・・。

今は片思いにからもしぐれへんけど

いつかは・・・・。

「ねえ、和葉ちゃん。」

「はー?」

「あなたもやつてみたらいどうですか?」

「へへへ! ! !

でかい訳ないやうつ! !

アホか・・・・。

「私、平次さんのこともうと知りたいです。」

「くれはさん・・・・。」

「そして、好きになりたい。」

「う・・・・・。」

「結婚したいです・・・・。」

「私は認めへんからなつ! !

私はその場から逃げ出した。

平次を連れて行かれそうだった。

くわはせんが、平次と結婚してしまつたら
いいからこなくなつむやうつかもしけへん！

いくら平次が反対したつて

ムリヤリつて」ともあるかもしねへん――

二十一

平次

「ぐれはちゃん、お疲れさん。」

「なんや平蔵さんかあ。」

一 あのアホ

「平次君のことですか？」

「 そやで、あいつホンマに鈍いんや。」

あなたにやべりや。。。。。

「静！？」

「ホーリー・ヒザイシ」

「俺は鈍くなんかあらへん！」

アハハハハ。

• } • } • } • } • }

私はおもいつきりドアを開けた。

「なんせ・・・和葉か・・・。

私は平次に抱きついた。

平次の胸で泣いた

和葉！？

卷之三

和葉はすこと泣いた。

和葉

よかつた
・
・
・
・
。

平次がここにいて

ホンマによかつた・・・。

バーンッ！

また雷が落ちた。

「つー

イキナリ真っ暗になった。

停電したんやろか。

けど、和葉は

俺の胸で泣きづけた。

ずっと・・・ずっと・・・。

* 8 「風せ・・・」(後書き)

本当に時間が無いですへへ；
テスト前ですしへへ；
あとがき書けなくなるかもへへ；
人(。。(。)「めんなさい。

* 9 「口移しやでー」(前書き)

またまたキスねた・・・^ ^ ;

* 9 「口~~あく~~じやへー。」

ホンマに真っ暗やつた。

いつの間にかはやんでいた。

真っ黒な雲も無くなつて

月が顔を出した。

けど、家は真っ暗や。

ブレーカーでも壊れたんやろか・・・。

「なあ・・・平次。」

「なあとい和葉が喋つた。」

「なんせ・・・?」

「分かつたから・・・。」

「分かつたから・・・。」

息苦しい。

心臓がバクバクいふとる。

和葉が近くにいるからか・・・?

子分やなかつたらなんや？

兄弟か・・・・・？

いや、兄弟やつたらドキドキセーへんや。

アカン・・・・・。

俺・・・和葉のこと？

違ひ・・・・・。

あつと・・・・・。

あつと・・・・・。

「・・・・・くればさんは平次のことをうと知りたいって言つてゐる。」

「えつ？」

「けど、知つて欲しくない。」

「・・・・・。」

「くればさんと平次が仲良くなるのはいやや。」

「和葉・・・・・。」

そや・・・・。

「俺やつて……。

「あんな・・・和葉。」

「ピンポーンー

なんや・・・タイミング悪い訪問者やなあ。

「はいはい、和葉ちよつと待つてしゃ。」

俺は部屋を出た。

廊下も真っ暗でほとんど何も見えなかつた。

「はー?」

「服部か?」

俺は戸を開けた。

「工藤! ねーちゃん!」

「よお、真っ暗だったから寝てるかと思つたぜ。」

「どうして真っ暗なの?」

「分からへど、さつきの瞳が原因だと想ひさせなじなあ。」

「そーいえば雷鳴つてたな。」

「和葉ちゃんは？」

「俺の部屋にいるで……。」

アカン……。

またフカフカしてきた。

目が……露む。

バタンッ！！

「服部！」

「服部君！――」

ガチャ・・・。

服部の部屋から誰かが出てきた。

「・・・あれ？工藤君と蘭ちゃん・・・平次――」

平次は倒れてしまった。

熱があるのに寝てなかつたからだらう。

新一は平次をベットまで運んだ。

蘭は静香に氷枕を貰ってきた。

和葉は必死に看病した。

アカソウヒンセイ

「えつと・・・八度七分ーー?」

「アカン・・・熱が上がつてしまつた。」

「なんでやろ・・・。

わいつあまで元氣やつたのに・・・。

「新ーー薬買つてきたよー!」

蘭は近くのコンビにまで風邪薬を買いに行つてたのだ。

和葉は急いで平次に飲ませようとした。

しかし・・・平次は口を開けなかつた。

「服部、口開ける!」

蘭は和葉に小さな声で言つた。

『口移しで飲ませたら?』

和葉は真つ赤な顔して

平次を見つめた。

平次に口移しやなんて……。

けど、平次……苦しそう。

どなこしよう。

「しゃーねーなあ・・・口移しして飲ませるか。」

「…」

アカン・・・それじゃあ。

平次のファーストキスが工藤君になってしまつやないか！

いやや、そんのいややー

「待つて・・・工藤君。」

「あん?」

「私が・・・やる。」

和葉は「ツップ」の水に薬を溶かした。

そして口に含む

「平次・・・『めんなあ。』

和葉の唇は平次の唇と重なる。

「ゴクン・・・・。

平次は薬を飲んだ。

「よかつた・・・。」

バタンシ

「和葉ちゃん!」

和葉ちゃんまで倒れてしまった。

おやりく服部の風邪が移ったんだわ!。

「お疲れ・・・和葉ちゃん。」

俺は静香さんに頼んで和葉ちゃんを布団に寝かせた。

和葉ちゃんはぐっすり寝てた。

それにも・・・服部。

お前はいいよなあ。

ファーストキスが和葉ちゃんで。

パツ

いきなり明るくなつた。

電気が点いたのだ。

「静香さん・・・・。」

「あら、新一君に蘭ちゃん。」

「そして・・・あなた。」

「上野くれはです。」

「大事な話があります。」

空には星が出ていた。

きれいな星達は俺等を見守つてくれていた気がした。

* 9 「口移しやでー」（後書き）

「んにちは

何話で完結するかも分からぬです^ ^ ;

なんとまたまたキスねたですよ。

いや、あのですね。

新一のファーストキスは蘭じゃなかつたので。
せめて平次は！と思いまして^ ^

蘭のファーストキスはコナンだし(* m) ププッ

この後見事にラブラブ・・・とはいかなかつたり。
けど、最後はハッピーエンドですよww

実は、次の連載のプロローグだケできました。

「コナンと哀のお話です。（コ×哀ではないです。）

シリアルにしたいなあ・・・なんて思います。

「罪人」の続編？かな？題名少しがぶつてるし^ ^

それでは、みなさん。

評価をよろしくお願ひします。

*10 「お願いせ」

「えっと……。」

新一は悩んだ……。

「ううこえは分かってもらえたんだつか……。」

「くわはさんは……服部との婚約をどう思つてますか?」

「それはもう嬉しいばかりです。」

「はあ……。」

くわはさんには婚約する気があるらしくな。

「けど、平次さんは私と婚約する気が無いみたいですね。」

そりやそーだろーなー。

服部には和葉ちゃんがいるし。

「上野さん、平次は恋愛に鈍いんや。」

そーだそーだ。

「僕、思つたです。服部は和葉ちゃんが好きなんです。」

「そりやそりやうひで。」

「服部のお父さんー。」

「あこつまでは和葉ちゃんの！」とを十分だと想ひてゐるや。」

あちやー・・・・。

あこつまでもんなこと嘗つてんのかよ。

「違ひますーー。」

「蘭・・・・?」

蘭は大声で言つた。

「和葉ちゃんが、遊園地で人質になつた時、服部君は和葉ちゃんを助けたわー！」

そうだよな。

オタクから和葉ちゃんを取り戻したからな。

好きだからこそ頑張つて取り戻せたんだ。

「けどな、蘭ちゃん。あいつはアホや。」

アハハ・・・。

ちゃんと分かつてゐなあ。

「和葉ちゃんを好きって直覺できてへんなり……。」

和葉ちゃんじゃない人でも「いつて」とか・・・。

「待つて……トセー。」

「和葉ちゃん！まだ起きちゃだめ！」

「平氣や、蘭ちゃん……。平次のお父ちゃん。」

「なんやっ。」

「平次は……婚約する気なんてないんや。」

「……。」

「私は……平次が好きや。」

和葉ちゃん・・・。

「お願ひします！くれはせん、平次を諦めてトセー。」

「……和葉ちゃん。」

「私は、平次さんを諦める気なんてありませんわ。」

「そんなん。」

「平次さんが、和葉ちゃんを好きって直覺したらね。」

「・・・分かつた。」

「和葉ちやん・・・。」

「私、頑張るからな。」

「楽しみにしてますわ。」

和葉ちやんは部屋に戻つた。

熱がまだ下がつてないのだ。

「新一君達も疲れたやろ、部屋用意したからソリで寝てや。」

「は、はい・・・。」

俺は何もできなかつた・・・。

服部の役に立てなかつた・・・。

「新一。」

「蘭?」

「新一・・・自分が役に立てなかつたとか思つてゐんじやない?」

「えつ?」

図星だし・・・。

「新一は役に立つたよ、だつて……。」

「だつて?」

「服部君と和葉ちゃん……キスしたのよ。」

「そつかよ……。」

「だから……ねつ。」

「ねつ……つて。」

「ちへ、邊りつけよ。おやすみ新一。」

「おやすみ。」

俺は電気を消した。

けど、服部のお父さんはおかしい。

服部の性格を分かってるはずだろ。

なら、鈍い「ゴだつて分かるだろ。

この話……裏がありそつだな。

まあ、とつあえず今日は寝よ。

* 10 「お願いや」（後書き）

こんにちは。

もう最終話が出来てしまいました。
なんか、前作の方がよかったです。

今回は微妙に・・・。

評価お願いします。

* 1-1 「俺の推理」（前書き）

タイトル失敗

* 1-1 「俺の推理」

チュンチュン

小鳥のさえずりが聞こえる。

もう・・・朝や。

早起きなアカンなあ。

「ん・・・。」

まだ・・・熱があるのでうつか。

いや・・・もう寒くない。

頭も痛くない。

治ったんや。

ンタントンタントン

「・・・。」

オカソの包丁の音か・・・?

朝食やろか・・・。

俺は下に降りた。

「…ん？」

• • • • ○

和葉！？

和葉が寝ていた。

ハアハアと息を切らしながら

顔を真っ赤にしながら

和葉！？

一大丈夫、薬を飲ませたから

卷之二

「まあ、脇部君の様に口移しじゃないけどね。」

「せつ？」

「和葉ちゃん・・・服部君に口移しで薬を飲ませたんだよ。」

「…ねーちゃん。冗談はよせや。」

「いや、冗談じゃねーぞ服部。」

「工藤・・・・。」

じゃあ……。

俺の熱が下がったのは和葉のおかげか……？

和葉が……俺に薬を飲ませたから

口移しで……ん？

口移し
！？

「口移し…？」

工藤とねーちゃんは笑って頷いたんや。

「あい、平次さんおはようござります。」

「あっ……上野さん。」

上野さんは手に包丁持つてゐる。

わらわの音は上野さんやつたんや……。

「熱下がつてよかったです。もう少しで朝食が出来ますよ。」

「は、はあ。」

「新一さん、蘭さんも待つてくださいね。」

「あつがとうござります。」

「私も手伝いましょうか？」

「いえいえ、のんびりしてて下せー。」

上野さんは朝食を作つてゐる。

「服部、話がある。」

「ん? なんや?」

「お前の部屋で話したい。」

「分かった……。」

「藤の奴……あらたまつてなんや?」

（平次の部屋）

「『』の話、裏があると思わないか?」

「わやわやわやわや…俺と和葉はやーこいつをやつて…」

「あん? 俺はくれはわんの『』と書ひこんだよー。」

「なんせ、上野さんか…ひえひー。」

「イキナリ婚約者ですなんて変だわ。」

（そつやそーやナビ。）

「それにお前はまだ分かつてないみたいだけど。」

？」

「お前は」

• { • { • { • {

卷之三

「和葉ちゃん、まだ寝ていいよ。」

ええ、じやあ平次と工藤君呼んでくるで。

一
ちよ！和葉ちゃん！

タンタンタン

階段をリズムよく上がる

まだ熱いけど

平次の顔を見たい。

恋しい

「お前は和葉ちゃんが好きなんだろ?」

えつ
・
・
・
?

平次の部屋の中から声がした。

工藤君の声や。

平次が私を好き……？

まさかなあ……。

「…………やつたらどうなこしよう。」

え？

「もし俺が和葉を好きやつたとしたりじなこしよう。」

「やれは・・・くれはせきにまつりんだな。」

「なんてや？」

「俺は和葉が好きなんやつてな。」

「~~~~~！？」

なに言ひしるん工藤君！

「セ、話を本題に戻すぜ。」

「ああ、俺もやつ思つてたど！」わ。

助かつた……。

心臓バクバクいってん。

アカン・・・・。

もつてに降りなな。

タンタンタン・・・・。

れつれつ

和葉の足音は静かだつた。

「つまり、服部と和葉ちゃんをくつ付ける作戦なんじやねーか？」

「せいや違ひで、一藤。」

「あん？」

「あの親父が手伝つと困つか？」

「それは・・・・。」

確かに・・・・。

そつは思えない。

だが、なんかおかしい。

なんか・・・・引っかかるんだよな。

「新一！服部君！」

「飯だよーー。」

蘭の声だ。

俺等は下に降りた。

服部は和葉ちゃんに小さな声で

「かんにんしてや。」

つて言つていた。

寂しげな表情を浮かべる服部に

俺は何をしてあげられるだらう・・・・。

* 1-1 「俺の推理を」（後書き）

明後日あたりにでも完結させなつかな・・・。

なんて思つたりもしたりして。
完結はひどいですよー。

前作のよりもひどいひどい
とりあえず評価お願いします。

* 1-2 「不幸やあー」（前書き）

今日で完結させてしまふ。

* 1-2 「不幸やあー。」

和葉が寝ている中

俺等は「」飯食べてたんや。

客が来るとは思つてもいなかつた。

ピンポーン

「ん？誰や？」

「オカソ、俺が出るさかい。」

「ややつたら早お出な。」

「分かつとる。」

俺は走つて玄関に向かつた。

ガラツ

「！？」

「何やつてんだよ、服部。」

「平次・・・遅いなあ。」

「何かあつたんじや。」

「！？」

服部の叫び声だつた。

何かあつたんじゃないかと思ひ

急いで玄関に向かつた。

一
脣部
！

一
脣部君！？」

平次！？

いつせにこ姐を出す。

しかし、平次は無事だった。

なぜか口をあんぐり開けている。

不幸や・・・。

外にいるのは・・・・！！

「人間心理学」

「富野！？」

外に立っていたのは

富野志保だった。

冷ややかな顔でこいつを見てきた。

「あら、あなたもいたのね。」

「・・・あのなあ。」

志保は平次に手紙を渡す。

「せつめ、男の子から預かってきたのよ。」

手紙の裏には『遠山和葉様』と書かれてた。

そして、『金山純』といつ宛名も書かれていた。

「かわいい子だつたわよ。」

「これつて・・・なんや？」

「あら、あなたそんなのも分からないの？」

相変わらずきついなあ。

「ラブレターよ。」

「…………。」

「あら？ 恋文って書つた方がよかつたかしら？」

「なんやてえええー！？」

「和葉ちやんに手紙でレター！」

「服部君、ピントじゃない！」

「落ち着きなさい、まだそう決まつた訳じゃないわ。」

「ほんまか？」

「けど、恥ずかしそうに私に手紙を託していったわ。」

・・・・「アーレターやないか。

どないしそうか・・・。

選択肢は二つや。

一 上野さんと幸せになる。

二 和葉と幸せになる。

三 一人以外と幸せになる。

どれや・・・。

二が一番ええかもしれない。

けど、こんなはつきりしてないのに

和葉を幸せにできるのやううか。

「どうする？ 和葉さんを取られちゃうわよ。」

「和葉は渡せへん。」

俺は強くそう言った。

和葉が好きかどうかはともかく

和葉は渡さへん。

「・・・そう、そういうてくれて嬉しいわ。」

俺はみんなを玄関に残して和葉のトコに行つた。

和葉の顔が見たかったのだ。

「スースー。」

和葉の奴、可愛い寝顔しやがつて。

「和葉・・・早お元気になるんやで。」

「・・・純。」

「くつ？」

「・・・純。」

「・・・。」

純・・・？

まさか・・・ラブレターの相手。

『金山純』

うそやろ・・・和葉。

和葉は・・・その純つて奴が好きなんか？

なんとか言えや・・・。

和葉！－

* 1-2 「不幸やあー。」（後書き）

いんこひは。

来週になつたら、もつ投稿じいじやなへなりやつ。
なので、今日中に完結させます。
頑張ります。

* 13 「大喧嘩や」（前書き）

大喧嘩なの・・・力な?

* 1-3 「大喧嘩や」

なあ、和葉。

俺はお前といると楽しいで。

けど、お前は違うんか？

和葉・・・。

「ん・・・。」

和葉は寝返りをうつた。

「平次・・・。」

「和葉・・・平氣か？」

「ありがとお、もう平氣や。」

よいしょと黙つて起き上がる。

和葉は笑顔で平次に言った。

「熱、下がつてよかつたなあ。」

「ああ・・・。」

「移して薬を飲ましてくれた和葉のおかげだ。

「……口移し。」

「えつ？」

「ホンマか……？」

「……う。」

和葉はたこみたいに顔を真っ赤にした。

「で、なんか用でもあるん?」

「……これ、お前宛やで。」

『金山純』からの手紙を渡す。

「……ラブレターみたいやで。」

「んなアホな。」

「お前……純って奴が好きなんか?」

「へつ?」

「寝血で向回も純つて言つてたで。」

「何言つてるん?」

「本当や！」

平次はイキナリ怒鳴つた。

「怒鳴る」とないやんか！」

「ホンマやで！ ホンマに繋つて言つてたで。」

「だからなんや！」

—なんやその言い方!—

「だつて、平次が怒るから。」

「わねえ!! お前はその純で奴を殺すやうだ!!」

— もええ、平次はぐれはせんとお蔵せに！」

・・・本氣か？

昨日は行くなどと言つてたやないか？

大ウソツキ

和葉の
・
・
・
アホ

「ホンマに上野さんと婚約するで！」

「エリザベスの胸中——」

・・・もおええ。

和葉は俺のことなんか好きや無かつたんや。

ちつとも・・・。

ガラッ

「平次、どないしたん?」

「オカン・・・みんなを集めてくれ。」

俺はみんなを集めた。

工藤やねーちやんやきつひついねーちやんと

オカソと上野さん

そして・・・和葉。

「みんなに話そいつと思つてな。」

後悔・・・しない。

絶対・・・。

「俺、婚約するで。」

「へつ・・・・・。」

「はつ」

卷之三

みんなが声を上げた

そし
鶯ぐたみ

かくに如絵在し才一
一之才異才

「本当にですか、平次さん？」

「ああ、ほんまやで。」

一
お
い
服
部
!!

「モテシ。朋吉君！」

平次：…せひとその気になつたんやな

おおむかせでふくらん

和葉の方は見れなかつた。

もう・・・ええ。

俺は・・・和葉が好きや。

けど、気づくのが遅かつたんや。

和葉は俺が好きやなかつたんや。

これでいいんや。

解決やないか。

・・・・・。

「平次・・・・・。」

・・・・見るな。

和葉・・・見るな。

お前の顔見ると・・・。

決心がつかないやないか。

アカン・・・。

苦しい・・・。

すじく苦しい・・・。

「じゃあ、婚約パーティは明後日にでもするで。」

オカソン……気が早いなあ。

まあ、早く婚約してしまおう。

和葉を諦めよう。

和葉は……純つて奴と

幸せになってくれれば

それでいいんや。

* 1-3 「大喧嘩や」（後書き）

またまた投稿します。

ああ、忙しい。

評価お願いします。

* 14 「すれ違いやな」（前書き）

ああ・・・駄作だ。

* 1-4 「すれ違いやな

私は、平次の家を後にした。

平次は私と顔を合わせようとなんてしなかつた。

志保さんは

『大丈夫、彼を愛してるのでしょうか？なら彼を信じなさい。』

そう言つた。

「…………」

私は自分の家に帰つた。

ガラツ

「ただいま…………」

「おひ、和葉。おかえりい。」

お父ちゃんの笑顔を見たら

なんだか安心出来た・・けど

ポロツ・・・。

「つ・・つ・・・。」

泣いてしまった。

子供の様に

声を上げて泣いてしまった。

「和葉……なにがあつたんや?」

「……実は。」

私は今までの出来事を全部話した。

もちろん、口移しは内緒やけど。

「そりゃ、平次君も怒るで。」

「なんでや?」

「そりゃ、知らない男の名前を寝言で言つてたらなあ。」

「それなんやけど……。」

俺は一人でヒマワリの園に向かった。

・・・一人で行くなんて。

なんて思いながらもベンチに座った。

「 」で・・・初恋の人を暴露したなあ。」

そう、 」で和葉が初恋の人だと言つた。

月明かりの下で・・・。

もう・・和葉は横にいない。

いるのが当たり前やつたのに。

「 つー！」

涙は出ない。

だが辛い。

すゞく辛い。

寂しい。

すゞく寂しい。

俺には・・・和葉がいなきや駄目なんや。

今頃自覚してしまつた自分が情けない。

情けないで・・・。

「 まるたけえびすにおしおいけえ よめさんうつかくたこにしきい

平次は歌つた。

一人ただ寂しく・・・・・。

初恋の少女が自分に残した歌を歌つた。

もう・・・・戻れない。

もう・・・・駄目だ。

・・・・・・・・。

『平次?』

『平次いーー!』

『平次・・・・。』

・・・・違う!ー!

俺は高校生探偵やで!

こんなんで諦めるなんておかしいやないか!

・・・・けど、どないしよう。

婚約パー ティは潰すつてのもなんかなあ。

・・・そやー！

「いこ！」と考えたでーーー！

平次は走つて家に帰つた。

「なに？それは本当か、和葉。」

「平次は勘違ひしてるんや。」

お父ちゃんに言つたらすつかりしたで。

「・・・そや、いい」と考えたでーーー！

「なんや、お父ちゃん？」

「耳貸してや。」

ひそひそ・・・・。

「それはええーありがとーーー！」

私は家を飛び出した。

平次の誤解を解きたかった。

解きたかった。

そして・・・もう一度

平次の胸で泣きたい。

『あなたの下に戻れてよかつた。』

そう言いたい。

平次！！

会いたい・・・。

会いたい！！

* 1-4 「すれ違いやな」（後書き）

作者「いやや…」

新一「うわあー後書き適当じゃん。」

作者「うるさい…」

新一「は…はい。」

作者「それではこいつの決め台詞…」

二人「真実はいつも一つ…」

* 1-5 「ハレハントモトヘイ」(前書き)

ああ・・・豊田が・・・。

* 1-5 「プレゼントやつて？」

俺は部屋に戻った。

そして、前買ったラブラブストラップを

机の奥から出した。

そして、それをポケットに入れて

和葉の家に行こうとした・・・。

トントン

「誰や?」

ガチャ

「・・・和葉さんとのところに行つてしまつのですね。」

「上野さん・・・。」

「気づいていました。あなたが婚約すると言つてくれたのは嬉しかった。」

・・・スマン、上野さん。

「けど、その時のあなたの顔は寂しげでした。」

「俺・・・スマンー!」

ギュッ

くればは平次の手を握る。

「頑張つて下さい・・・平次さん。」

「おおきこ・・・上野さん。」

バンッ

俺はおもいつきりドアを開けた。

ダダダダダダ

階段を駆け降りる。

「服部!」

新一は平次を呼び止めた。

「なんや、工藤か。」

「・・・これ、俺の母さんから。」

「えつ?」

工藤は俺に白い箱をくれた。

中身は・・・・。

「タキシード・・・・?」

黒いタキシードだった。

結婚式で着る様な立派な物だ。

「二人の仲が進展します様にだって。」

「・・・サンキューな。」

「それと、富野から・・・和葉ちゃんへつて。」

また白い箱だ。

中はまだ見ないでおいつ。

「・・・なあ、工藤。」

「あん?」

「俺は・・・和葉が好きや。」

「いや、知つてたし。」

「なんでやーー!」

俺、そんなこと言つたか?

なんですかーー?」

「……見てくれれば分かるよ。」

「へ?」

「お前、ひーーー俺達に似てるよ。」

「工藤……。」

「頑張つてこよ、服部。」

「あーーー。」

パンツ

一人は手を叩き合つた。

そして、服部は行つた。

皿をキラキラさせて……。

後ろには

優しく微笑む

くわはさんがいた。

「くわはさんに聞きたいことがあります。」

「あら・・あなたにはばれていたのですね。」

「もへ、その話し方・・・やめたうぢりですか?」

「・・・そやな。」

「「」の婚約はうづですね。」

「・・・なんのためやとゆうへ。」

「一人をくつ付けるために。」

「正解や。」

「あなたのおかげでもありますし。」

「あの一人自身の力のおかげでもある。」

「くれはさん・・・。」

「なんや?」

「あなたは・・・服部の「」と。」

「好きやつたかもしれません。」

「・・・やうですか。」

「けど、まさか平蔵わんまで協力するとは思ってもしなかったで。」

「僕もです。」

くわはさんはまた微笑む。

「平次さんが婚約すると言つた時は焦つたで。

「僕もです。」

「作戦失敗になるといやつたもん。」

「あいつ・・・鈍いといつかなんていうか。」

くわはさんは笑つてた。

それにしても・・・

くわはさんはどこから來たんだ？

* 15 「プレゼントやで？」（後書き）

作者「こんにちは！」

志保「ところで、新連載はいつからかしり？。」

作者「えと・・・落ち着いたらです。」

志保「哀が出るのよね。」

作者「その通り。」

志保「まあ、せいぜい頑張りなさい。」

作者「は・・・はあ、それではいつもの決め台詞ー。」

二人「真実はいつも一つ！」

* 1-6 「呻吟やめたな」（前書き）

ああ・・・忙しい。

* 1-6 「再会できたな」

平次・・・好きや。

平次・・・『めんなあ。

けど、誤解なんや。

純つて言つてたのは・・・。

誤解なんや。

私は玄関の戸を開けた。

走つた。

平次の家まで走つた。

「」を曲がれば平次の家や！

バンツ

「いた・・・。」

誰かとぶつかつてしまつた。

「『めんなさい！私・・・！？』

「和葉・・・。」

「平次……。」

私達はヒマツコの園に向かつた。

「……なあ、平次。」

「……。」

「平次?」

「あつ、すまんすまん。それよりこれ。」

平次は私に小さな袋を渡した。

中は……。

「これ……ラップストラップー。」

「わやで。」

「……じやあ、平次……。」

「俺は……和葉の」と。

「……和葉の」と。

「……和葉の」と。

「……和葉の」と。

「・・・す・・す・・・。」

「もおええ。」

「くつ?」

「言わなくても・・・分かるで。」

「和葉・・・。」

「私・・・平次が好きや。」

「えつ・・・。」

「大好きやで。」

「・・・それ、ホンマか?」

「ホンマやで。」

「夢やうひか・・・。」

和葉も俺が好きやなんて。

「うやうや・・・。」

「・・・それと、純のことやけど。」

「ああ・・・。」

「純つて・・後輩やで。」

「へつ?」

「金正純けいちゃんや。」

「ちやん・・・?」

「女の子やーー。」

「はあー!?.」

後輩の女の手紙のために

俺はこんなに悩んでたのか?

アホや・・・。

「俺・・・アホやな。」

「なあ・・平次。」

「ん?」

「平次からもなんとか言つて。」

「その・・・。」

「へつ・・・。」

アカン・・・！

これって告白じりってことか！？

そんな！？

「す・・・す・・・す・・・。」

「す？」

「す・・・す・・・す・・・。」

「お前が・・・好きや。」

「よくできました。」

和葉は俺の横に座った。

やつぱり・・・俺には

和葉がいなきや駄目なんや。

好きやで・・・和葉。

* 1-6 「再会できたな」（後輩や）

中学生は忙しきなあと実感中の奈津美です。

* 17 「婚約パーティー や！」（前書き）

次回で最終話です。

* 17 「婚約パーティー や！」

婚約パーティー 当日

俺はタキシードを身にまとった。

上野さんにも頼んだ。

婚約パーティー の間に

サプライズを用意したのだ。

それに協力して欲しい。

そう頼んだのだ。

「それでは、平次とくれはさんの入場です。」

ジャジャジャジャーン

おいおい・・・オカン。

これは結婚式やる。

俺は上野さんと入場した。

つていつも俺の家やし

ただの居間やけどな・・・。

「あなたはくれはさんと婚約することを誓いますか？」

・・・誓つ訳無いやろ。

俺は和葉が好きなんやから。

「誓い・・ま。」

ガラツ

来た！－

「平次！行くで！－！」

志保からもりつた

ピンクのウエディングドレスを身にまとっていた。

「ああ！－！」

二人で逃げるで、和葉！

くればさんは笑顔でよかつたなの一言。

「待てや、平次！誓いま・・・まで言つてたやないか！」

「・・オカソ、俺は誓いませんつて言おうとしたんやで。」

そういう残して

俺と和葉は逃げた。

「静香さん、作戦は成功したで。」

「お疲れ様、くわはちゃん。」

「お疲れさん。」

「ありがとうございました。」

「ありがとうございました。」

「遠山さん！」

「久しぶりやな、くわはちゃん。」

「遠山さん！」

作戦は大成功。

つまり、この五人で考えていた計画は

大成功をおさめたのだ。

蘭は一人分かつてなかつた。

宮野は分かつてたらしい。

おめでとう・・・服部。

ほら・・・空は笑ってるみたいだぜ。

雲ひとつない空を新一は見上げた。

ヒマワリのが見守る中

二人だけの婚約パーティが行われる。

「遠山和葉さん、あんたは俺と婚約してくれることを誓うか?」

「もちろん・・・平次は?」

「誓ひに・・・決まつたるやないか。」

「ホンマ?」

「ああ。」

「夢じやないよね。」

和葉は涙をこぼす。

「夢じやないで。」

二人は小さくキスをした。

そして・・・見つめ合った。

「・・・みんなに感謝せなアカンな。」

「平次が鈍いからやで。」

「なんやそれ!」

「ホンマのことやないか!」

二人はいつもの様に口げんか。

いつもとは違う口げんかだ。

平次はタキシード。

和葉はドレス。

そして、ひまわりに囮まれた

微笑ましいといつてもいいかもしけれない

口げんかだった・・・。

* 17 「婚約パーティー や！」（後書き）

作者「こんちや！」

蘭「こんにちわ。」

作者「いやー短かったよ。」

蘭「なんか・・・手抜きじゃない？」

作者「いや、頑張りましたよ。」

蘭「真実はいつも一つ！」

作者「ええ！勝手にやってるし！」

蘭「あれ？ いけなかつたの？」

* 1-8 「未来や」

（5年後）

「・・・蘭ちゃん、おかしくない？」

「平氣よ、とっても素敵だもん。」

「ならええけど・・・。」

和葉はあのピンクのドレスを着ている。

蘭がメイクをしてあげる。

みるみるうちに可愛くなつていいく和葉を見て

蘭は「」と笑った。

「・・・平次と結婚できるなんて。」

「やうね、私も夢見たいだったもの。」

蘭たちは三年前に結婚式を終えた。

子宮にもめぐまれて

素敵なお生活をおくりしているそつだ。

「かずはちゃん、かわいいよ。」

「ありがとな、鈴ちゃん。」

鈴といつのは蘭と新一の間に生まれた子供だ。

蘭と関連のある名前だ。

鈴と蘭を合わせれば

『すずらん』になるからだと和葉は思った。

トントン

「和葉・・・開けるで。」

「ええよ。」

ガチャ

平次は黒いあのタキシードに身をまとつ。

「・・・綺麗や。」

「恥ずかしいやないか、そんなこと言われると。」

一人はとても幸せそうだ。

新一は蘭の横に行つた。

「あの一人ならやつていけるな。」

「そうね。」

「こんにちはー！」

「くわはさん・・。」

くわはさんは平蔵の親友の娘なのは事実。

更に新たな事実が分かつた。

なんと、新人刑事だつたそうだ。

それにはみんな驚いた。

客席には

少年探偵団のみんなと園子

博士に志保に毛利夫妻。

そして、工藤夫妻。

もちろん結奈と裕也もいた。

そして・・・俺と蘭も。

仲人は大滝さんだった。

「そつそつそれでは、新婦新郎の入場でででです。」

アハハ、大滝さん緊張してる。

服部・・よく頑張つたな。

おめでとう。

ジャジャジャジャジーン

ジャジャジャジャジーン

ジャジャジャジヤン

ジャジャジャジヤン

二人は笑顔で入場してきた。

「なあ・・・平次。」

「なんや? 和葉。」

「今・・・すつ」く幸せやで。」

「そつか・・・。」

「平次は?」

「俺は・・・。」

今までいろいろあったけど

本当にここまで来たんだなんて

考えていた。

上野さんやオカソや親父や

工藤やねーちゃんやみんなのおかげでもある。

みんながいなかつたら

ここまで来れなかつたかもしねへん。

ありがと、・・・。

ホンマに感謝してるので

「和葉。」

「ん？」

「俺も・・・、あ！」
「幸せやで。」

「あらがとお・・・。」

「それと・・・。」

「それと・・・？」

「大好きや・・・。」

「私もや・・・。」

真上の窓から空が見えた。

雲一つ無い晴天だ。

なんて綺麗な空だらう・・・。

俺が今まで見てきた空で

一番綺麗な空やで・・・。

h
a

完

* 1-8 「未来や」（後書き）

奈津美です。

みなさんにはいろいろとご迷惑をかけまして・・・。
一日で役10話を投稿するだなんて・・・。

評価やアドバイス欲しいです。

次回作についての意見も沿えてくれると幸いです。

なんか、完結微妙でしたね。
反省しております。

みなさん、「愛読？」ありがとうございます。
そして、「これからもよろしくお願ひします！」

2006 9 30 (土) 17:05

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9700a/>

ライバルは婚約者！？

2010年10月15日12時29分発行